

ICC Kyoto

Kyoto International Conference Center

冬

Winter 2013

年頭のご挨拶

巻頭言 (公財) 国際文化会館理事長 明石 康 氏
元国連事務次長

自主企画シンポジウム

「若者よ、世界へ飛び出そう！」 - 広中 和歌子 氏



年頭のご挨拶

国立京都国際会館は、1966年（昭和41年）に日本で最初の国立の国際会議場としてオープンして以来、今年で47年目を迎えることになりました。開館以来、世界に京都の名を轟かせた「京都議定書」、「Kyoto Protocol」が採択された地球温暖化防止京都会議（COP3）や第3回世界水フォーラムなどの政府間会議、多くの学会、企業セミナー等、累計1万6000件を超える数多くの重要な国際・国内会議の舞台となり、関係者の御努力により国内、海外から高い評価を頂いているところであります。また、ご利用いただいたお客様の数は、1,000万人以上を数え、内外に誇る日本の国際会議場としての役目を果たしております。

半世紀近く、日本の国際相互理解を促進し、科学技術、医学、文化等の振興や地球環境の保全等に寄与し、日本のコンベンションの先駆者として日本から世界へ情報発信する場として貢献してまいりましたが、開館50周年に向けて、規模や機能、サービス面において現在のコンベンションのニーズに対応した最先端の施設を目指して、今後、積極的な様々な取り組みを進めていきたいと考えています。

1200年の時を超えて文化と歴史が息づく京都に位置する国立京都国際会館は、今後、更に京都の特性と会館の魅力、実績を戦略的にアピー



理事長
稲盛 和夫



館長
木下 博夫

ルし、古都・京都に息づく「おもてなしの心」をもって、会議主催者や参加者に心から満足いただけるようより一層精進してまいります。

今後も、国立京都国際会館は日本国内だけではなく、アジア地域のリード役として国際コンベンション（MICE）を牽引できるよう、そして世界平和と繁栄のために寄与できるよう関係各位のご協力を賜りながら邁進してまいります。引き続きご支援を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

公益財団法人 国立京都国際会館
理事長 稲盛 和夫
館長 木下 博夫

巻頭言 国立京都国際会館への期待

国立京都国際会館に懸ける夢を、私は暖めてきたといえる。この会館は宝ヶ池のほとり、寝子ヶ山の懷に抱かれている。山の感じがなだらかで優しいので、或るインド人はこれも天皇陵の一つではないのかと質問した。イギリス人科学者は庭園を見て、幾何学的に広がっていくヨーロッパの庭と、小さな空間に宇宙を凝結してみせる日本の造園との違いを熱っぽく語っていた。

21年前に、会館で行われた国連主催の軍縮会議の時だ。討議の緊張から解放された37カ国の参加者は、二条城の奥の池を渡ったところで、裏千家の人々による茶の野点を受けた。樹々の鮮やかな緑と緋もうせんが織りなす対比の美しさに人々は息を呑んだ。当時の田邊市長が、この街は「日本人の心のふるさとだ」と挨拶しても、それを誇張だと思ふ人はいなかった。



▲ 第2回 国連軍縮京都会議（1991年5月）

進行していくグローバル化の中で、この国はいま、活力のある開かれた国造りを目指している。それは輝かしい歴史や伝統をきちんと維持し、自己アイデンティティーを自覚する中で行なわれなければならない。世界中の優先的な議題が会館に持ち込まれて議論され、近代的かつ快適な雰囲気の中で合意が達成されるならば、その知的な波紋はきっと国境を超えて広く世界に伝達されていくにちがいない。

幸いにして、近代化の過程でこの国が失った多くの遺産は、京都にまだ残されている。国宝級の建築、庭園、彫刻、絵画、しっとりした街並みなどが各所に息づいている。照れ屋で口下手な日本人にとって、京都ほど日本文化を雄弁に語り続けている街は見つからない。

大型の国際会議の数が倍加し続け、アジア諸国は激しい誘致競争を繰り広げている。この点で、この国がシンガポール、香港、上海、ソウルなどに圧され気味なのが気になってしかたない。勝負は会場施設だけではない。近接した宿泊施設、交通渋滞対策、国際空港からのアクセスの問題など、改善を要する点は目白押しなのである。

（公財）国際文化会館理事長
元国連事務次長

明石 康

明石 康氏 - 略歴

東京大学卒、ヴァージニア大学大学院修了。1957年国連入り。広報や軍縮担当の国連事務次長、カンボジアや旧ユーゴスラビア担当の事務総長特別代表を歴任。1997年末、人道問題担当事務次長を最後に退官。現在、（公財）国際文化会館理事長、スリランカ平和構築及び復旧・復興担当日本政府代表、（公財）ジョイセフ（家族計画国際協力財団）会長、（公財）国立京都国際会館評議員などを務める。主な著書に『国際連合－軌跡と展望』（岩波新書）、『戦争と平和の谷間で一國境を超えた群像』（岩波書店）、『「独裁者」との交渉術』（集英社新書）など。



2012年国際会館自主企画シンポジウム

「若者よ、世界へ飛び出そう！」

2012年9月22日 国際会館 Room D

第1部 講演会 『可能性発見の旅へ』

財団法人 水と緑の惑星保全機構 理事長
(元参議院議員環境庁長官) 広中 和歌子 氏



[広中 和歌子 氏 略歴]

東京都生まれ。お茶の水女子大学卒、ブランダイス大学大学院文化人類学修士。参議院議員(1986～2010年)を4期務め、国務大臣・環境庁長官などを歴任。現在は、財団法人 水と緑の惑星保全機構 理事長、地球環境行動会議 事務総局長などを務める。

広中氏：本日のテーマ「若者よ、世界へ飛び出そう！」ですが、「清潔」「便利」「安全」な日本を出て何故海外に、と思われる方はたくさんいらっしゃると思います。しかし、私が生まれ育った時代はそうではなかった。敗戦後の日本を何とかしよう、海外から学ぼう、海外雄飛を！という時代でした。日本を負かした国を見たい、知りたいという思いが非常に強かったのを覚えています。

私は大学卒業後、ボストン郊外にあるユダヤ系アメリカ人によって作られたブランダイス大学に、奨学金を得て留学しました。第二次大戦後、ユダヤ人は自分たちの国を持ち、アメリカでもユダヤ系の人々が差別されずに胸を張って生きられる時代が来ていました。だから今度は自分たちが大学をつくってアメリカの社会に貢献したい、留学生を世界中から集めて、アメリカの文化を知り学んでもらうと同時に、アメリカ人の学生達が外国人留学生との交流を通して国際的な感覚を身につける、という趣旨で設立された奨学金でした。その入学式で J.F. ケネディー上院議員にお目にかかりました。そのころの私は、二年後の彼の大統領演説の有名な言葉「国のために何ができるかを考えよう」どころか、どういう生き方をしたらいいのだろう、という人生の岐路に立っていました。そのような中、近くのハーバード大学に留学中の数学者と出会い結婚しました。初めて自分の居場所、原点が定まった感じで、何か学んでみたいと真剣に思うようになり、再び大学に戻って文化人類学を専攻しました。

当時、アイゼンハワー大統領時代のアメリカは非常に保守的で、女性は戦争から帰還した男性を迎え入れ、幸せな家庭を築くという「マイホーム」の時代でした。しかし、ケネディー大統領の時代になってアメリカは変わりました。ベティ・フリーダンという女性が、「新しい女性の創造」*The Feminine Mystique* という本を書いて、アメリカにウーマンリブの革命を起こしたからです。戦後の豊かなアメリカで、この運動が家庭の主婦から起こったという点で非常にユニークでした。当時、人種差別は厳然として存在していました。全ての人が平等であるべきとか、男女同権とかは理想であっ

て、実際にはそうではない現状があり、少数民族、黒人だけではなく、女性も差別されているということで、全米に公民権運動が広がり、そこに輪をかけたのがベトナム戦争でした。第二次世界大戦の国難ではみんなが心を合わせて戦いましたが、ベトナム戦争には多くの若者が疑問を持ち、反戦運動に立ち上がったのです。徴兵カードを破り、ニューヨーク、ボストン、パークレイなどの大学町から運動は広がり、そのような中で保守的だったアメリカは少しずつ少しずつ変化していったのです。

その後、子供達の手が離れた私は、アメリカ人が戦後の日本をどうみているかということに興味があり、1年間ハーバード大学のエズラ・ヴォーゲル先生の“日本の社会”という授業を聴講しました。それがとても面白かったので、本にまとめられたら私に翻訳させてほしいと申し出、それが 1979 年 *Japan as Number One* として日本で出版され、超ベストセラーとなったのでした。この本は日本人を勇気付けましたが、同時に自信過剰にさせたきらいがありました。その後、日本ではバブル経済が起り、そして崩壊し、その後 20 年間の経済低迷があるわけです。

他方、日本をとりまく世界は冷戦後、ますますグローバル化する中で、アメリカでは競争力強化をめざし、IT 産業、金融工学などの分野で世界をリードし、EUでも政治、経済の統合が拡大、深化し、中国、インド、ブラジルなど BRICS 諸国の経済発展には目を見張るものがあります。こうした中、日本経済はこのままでよいのか、生き残れるかという焦りの声があります。

こうした経済のグローバル化の中で、新たな課題も多くあります。地球規模の環境問題、貧困問題、地域紛争などの課題です。こうした課題の多くが G8, G20 などの国際会議の場で話し合われます。また、課題によっては二国間、多国間対話、政府間協議の場で決められます。そうした場では、国際感覚をもつ人材が求められます。そうした人材は海外留学や勤務、協力隊などの体験や、海外からやって来る人、留学生との交流で培われます。そうした幅広い体験を通じて自国の論理だけで考えない、グローバルな視点を持ち、思考

できる人材が求められます。

また、そうしたグローバルな発想から、人は人間としての最低限の生活ができるべきという、アマティア・セン博士と緒方貞子氏の唱える「人間の安全保障」のコンセプトや、地球環境を考える「地球憲章」の動きもあります。そのメッセージは、人類だけが地球の唯一の住民ではないということです。この地球は自分た

ちの世代だけで終わらせてはいけないのです。これからは日本の若者も共生という大きな視点に立ち、自分の国の中で勉強するのも大切ですが、同時に外国に行き、プラスだけでなくマイナスの体験もすることでより広い視野をもち、新しい日本と世界をつくることに期待したいです。

第2部 対談

学校法人立命館 副総長(国際・新戦略担当)

広中 和歌子 氏 × モンテ・カセム 氏

(公財) 国立京都国際会館 館長
コーディネーター 木下 博夫

[モンテ・カセム 氏 略歴]

1947年スリランカ生まれ。スリランカ大学卒、東京大学大学院工学系研究科博士課程都市工学専攻単位取得。1985年国際連合地域開発センター主任研究員を経て、1994年立命館大学入職。2004年立命館アジア太平洋大学長に就任。2010年より学校法人立命館 副総長(国際・新戦略担当)を務める。



館長 / それでは後半戦に入ります。日本への留学経験をお持ちであり、また日本にアジアの学生を受け入れる場づくりをしてこられたカセムさんからお話しいただければと思います。

カセム氏 / 私自身も 40 年前は、内向きと言われている今の日本の若者と全く同じでした。意志の強い母親に「世界を見てこい」と言われ、奨学金に応募して日本にきました。母親に追い出されたことが今の私を形成しています。今大学で、もっと英語を勉強しろと言いますが、言語だけを取得したらいいのかという感じがします。私は高校時代、英語教員に、何をすれば英語が上手になりますかと聞いたら、面白い人間になれば、話す内容が出るからどんな言葉でも話せるようになるからと。外に出る準備としては、それが大事だという気がします。立命館アジア太平洋大学では 90 カ国から若い方々が 3 千人位来ており、全体の 47%位を占めています。多様な人が集まる器では創造力を肌で感じるんです。私が皆さんにお願いしたいことは、自分の人生を有意義なものにするためにも、対等に普段着で付き合える場をつくることです。普段からいろんな違った背景の人たちと一緒に付き合うことができれば、面白い未来が築けると思います。これからの未来を京都から築くのであれば、留学生 5 千人を 5 万人にする計画が

大事だと思います。そして国内だけでなく、世界を相手に仕事をしながら貧しい国々の方とも付き合い、彼らの富をどうつくっていくかを大切にしないといけないと思います。

館長 / 今回のシンポジウムの副題に「可能性発見の旅へ」とありますが、このフレーズはこのシンポジウムの討議のため広中さんがたどりついた題であります。カセムさんのお話と合わせて、お話をさせていただければと思います。

広中氏 / 人にはそれぞれ与えられた環境があります。生まれた国、地域、家庭、育った環境、私の場合は戦中、戦後という時代が非常に変化に富んでおり、焼け跡のようなところから出発しているわけです。ともかく、もっといい世界があるはずだと。今の日本を変えなきゃいけないというような気持ちが子どもの時からありました。時代がそうさせたのだと思います。オニール夫妻の「四十歳の出発」*Shifting Gears* という本を翻訳したことがあります。現代は危機の文化、危機の「危」は危険という字、危機の「機」はチャンスという意味です。危険かもしれないがチャンスもある、チャンスを取ると新しい道が開けるという意味だと思います。人は 40 歳位になって、こんなはずではなかったと思ったら、そのまま流されていくのではなく、立ち止まって考えてみるとか、協道にせれるとか、ギア /



チェンジしながら人生を渡っていく訳です。人生の変わり目で次の人生をスタートできるのだということで、「四十歳の出発」という題を選んだら、日本でベストセラーになりました。運も良かったのですが、やはり私自身が問題意識を持っていたことが、次の人生の選択肢を与えられたのだと思います。うまくいく選択もあれば、失敗する選択もあるけど、仮に失敗でも必ずしもそこで終わらないのです。次にシフトすれば成功への道に繋がるかもしれない。そういう楽天性が次のギアチェンジを導きます。ともかく人は新しい物事・世界・土地にチャレンジすることだと思います。

館長 / カセムさんのお話をまとめると、1つは面白い人間になれ、もう1つはクリエイティブなことに対する積極性の2つのキーワードを言っておられると思いますが、何か日本の若者に対して、アドバイスをご提案いただけますか？

カセム氏 / やはり受験勉強を卒業しなければいけないと思います。受験勉強が、面白い人間になるよりも無難な正しい答えを出す人間にさせています。氷が解けたら何になるかと聞かれたら「春」と答える人間にならないといけないと思います。今は、人間や地球の生命がどうなるかという危機の時代なので、そのような課題の解決方法を探すには、数多くの多様な方がいると対応策も非常に面白くなると思います。大学での一番の課題は、面白い多様な人間の出会いの場をどうつくればいいのかということです。そこで大学人と民間企業、官庁や海外の方々と一緒になって、そういう「場」をつくらないといけないと思います。

館長 / 今の学生は就職活動を2年生、3年生のときから一生懸命やっているのが現状です。余裕を持って先ず1回海外に行って、いろんな経験をしてきて帰ってきた人こそ、その良さを認めてあげられるような社会自体が考えていく環境づくりが必要だと思います。

カセム氏 / 日本社会の中にそのような場に参画しづらい環境が形成されていると思います。就職が一番代表的な例だと思います。ただ最終的に面接を通る人は、面白い経験が勝つんです。

館長 / 広中さんが貨物船に乗って留学された時代と今の時代では、留学する苦労は違うと思いますが、最近の風潮をどうみられていますか？

広中氏 / 学校制度、企業が変わらないのであれば、自分たちで変えていくしかないので。自分たちで変えられないのなら、外国人を利用して、または外国で成功して日本に持ち込むなど、いろんなやり方で積極的に動いたらよいと思います。日本の企業にとってなぜ新卒がいいのでしょうか。私もアメリカから戻ってきた時には、就職したくても年齢制限がありました。このように自分たちで作った規制で企業も学生もがんじがらめになっている日本を変えないといけないと思いますが、それを変えるのは若い人たちが行動を起こすことです。自分が変化の主体となり、新しい問題意

識を持って、切り抜けていく先駆的な人材が育ってほしいと思います。

館長 / 京都の地に留学生を抱える環境を作り、それを基盤に世界への発信力を高めていこうとする戦略に国立京都国際会館もぜひ手をお貸ししたいと思います。

カセム氏 / 今の日本人学生 15 万人に対して 5 万人ぐらい留学生がいれば、社会的な変革が起きるだろうと思います。京都のように科学技術のイノベーションや様々な可能性がある所であれば、今の 10 倍ぐらいの留学生を呼んでくることも可能だと思います。そのような観点から経済効果があり、留学生が来ている国と架け橋役になることは、世界経済に参加する1つの大事な資源になります。このような総論にはみんな賛成だと思いますが、各論をどうすればいいかというのが課題です。そこで 2014 年あたりにイノベーション、エデュケーションサミットの日本版を考えています。社会や教育システムの中にある課題を解決しながら 2014 年に大きな国際サミットをやることで、動かない現場も動かせるかなと思っています。

館長 / 私は京都市副市長時代に市長に進言して、市長と大学の学長とのお付き合いを積極的に推進したことが、今の大学コンソーシアムが結成されることに繋がり、大学間の交流も活発にすることが出来たと思います。留学生増加は京都で学んだことを留学生が持ち帰って各国で京都イズムが実施されたり、そのことに刺激を受けて、日本の学生が海外に飛び出すなどが実現すれば、副次的な効果が期待できると思います。

折角ですので、是非お二人にご質問なりご意見がある方は挙手してください。

参加者A氏 / 私は学生ですが、無難に生きることが難しくなっている世の中で外へ出ていけと言われても出にくく、若者が自分たちで行動を起こすというのも少し難しいと思いました。ただ私達が変わっていかないと日本全体が変わらないと思ったので、海外の方が来やすい環境を作ることが感性を豊かにすることになると思いますし、そういうことがこれから大事になると思いました。

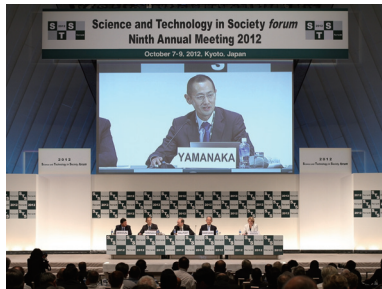
館長 / 今日の討議が次のステージにつながる事を期待して、熱のこもったシンポジウムを閉じさせていただこうと思います。【了】



▲ ご講演後の記念撮影

開催されたイベント

科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム (STSフォーラム) 第9回年次総会 2012年10月7日～9日



科学技術と人類の未来に関する国際フォーラム (STSフォーラム) 第9回年次総会が10月7日～9日の3日間開催されました。96の国・地域・国際機関から約1,000名の科学技術、政治、ビジネス、大学など各界の世界的なリーダーが参加し、いかにして科学技術の「光」を伸ばし、「影」を克服していくか、いかにしてイノベーションを促進していくかについて活発な意見交換が行われました。「世界の保健問題」をテーマにした全体会議では、本年ノーベル医学・生理学賞を受賞した京都大学の山中教授が講演され、民間企業が特許を取得した場合のコスト高が、新たな医療技術の普及を妨げてしまう問題を提起されました。 ※写真の著作権はSTSフォーラムに帰属いたします。

世界遺産条約採択40周年記念最終会合 2012年11月6日～8日



世界遺産条約採択40周年記念最終会合が、日本政府（外務省、文化庁、環境省、林野庁）の主催、ユネスコ世界遺産センターの協力の下、11月6日から8日までの3日間にわたって開催されました。世界遺産条約は1972年に採択され、世界遺産一覧表にはエジプトのピラミッドや中国の万里の長城、「古都京都の文化財」など962件が登録されています。また、条約締約国は190カ国にのぼります。

開会式では、議長を務めた外務省文化交流担当大使の西林氏が「世界遺産条約が将来も役割を果たすように、世界遺産の現在、過去、未来を考えたい」と挨拶され、続いて、ユネスコのイリーナ・ボコバ事務局長は「条約は国際協力のモデルとなり、それ自身が人類共有の遺産となった。将来の為に守らなければならない」と述べられました。会場 (Room A) の前には、日本の世界遺産を紹介した写真パネルや映像上映が行われました。

3日間の日程で開かれた最終会合には60カ国から約600名が参加し、議論の成果として、世界遺産の保全と地域社会の関わり方の重要性などを謳った「京都ビジョン」を発表し閉幕いたしました。

第40回日本救急医学会総会・学術集会 2012年11月13日～15日



第40回日本救急医学会総会・学術集会が11月13日から15日の3日間にわたって開催されました。京都で初めての開催となり、「救急医学、この未知なる世界から拓かれた未来へ」とテーマを掲げ、会期を通して5,000名近い出席者が集い、シンポジウムや口演に聞き入っておられました。また、イベントホールでの企業展示は、今までで最大規模の展示となりました。

中谷壽男会長はじめとする関西医科大学救急医学講座では、参加者の皆様に京都らしいおもてなしを楽しんでいただくよう様々な工夫をされ、14日の会員懇親会では、澄んだ秋の夜空に花火が打ち上げられました。

最終日はあいにく小雨がばらつきましたが、晴れ間と同時に庭園に虹が架かりました。本学会が救急医学の未来への架け橋となることを示しているような素晴らしいものでした。

第9回国際糖尿病連合西太平洋地区会議・第4回アジア糖尿病学会学術集会 2012年11月24日～27日



糖尿病患者数が最多であるアジア西太平洋地区では、民族や文化的背景も多彩なことから糖尿病の病態が多様であり、科学的根拠に基づく糖尿病のアプローチが急務な状況です。今回は、「西太平洋地区における糖尿病の多様性の探求；科学的根拠に基づく糖尿病の教育とケア」をテーマに東アジア、東南アジア、その他西太平洋地区の医療者、研究者4,081名が一堂に会し、糖尿病に関する①臨床ならびに基礎研究 ②教育 ③治療 について議論を展開しました。

また、市民イベントとして「市民公開講座」、「3Kmラン&ウォーク」、「体がよこぶ健康いきいき体操」、「糖尿病カンパセーション・マップ」が開催され、

参加者数は1,598名でした。糖尿病減少に関するアピールのため、国際会館をはじめとする二条城、東寺、清水寺等の名所がブルーにライトアップされ夜空に幽玄な姿を浮かべました。

会期	催事	参加者数
1月12日～13日	第16回日本病態栄養学会年次学術集会	3,600人
1月18日～20日	公益社団法人日本青年会議所2013年度京都会議	14,000人
1月26日	HORIBA 創立60周年式典	2,500人
2月2日～3日	第16回近畿薬剤師学術大会	1,500人
2月3日	第13回動脈硬化教育フォーラム	400人
2月7日～8日	第51回関西財界セミナー	700人
2月16日	希少難病フォーラム2013 京都会議	200人
2月16日	京都環境文化学術フォーラム スペシャルセッション	100人
2月17日	第4回KYOTO地球環境の殿堂表彰式・京都環境文化学術フォーラム 国際シンポジウム	1,000人
2月22日～23日	第43回日本人工関節学会	2,000人
3月10日	第13回日本糖尿病療養指導士認定試験	500人
3月23日	第32回認定証授与式及び認定披露パーティ	300人
4月3日～7日	第14回国際骨髄腫ワークショップ	2,000人
4月18日～21日	第57回日本リウマチ学会総会・学術集会	5,000人
4月23日～26日	Beta Cell Workshop 2013 Kyoto	120人
5月10日～12日	第85日本消化器内視鏡学会総会	7,120人
5月17日～18日	第53回日本リンパ網内系学会総会	400人
6月1日	京都コンピュータ学院創立50周年・京都情報大学院大学創立10周年記念式典	2,000人
6月2日～7日	第19回固体イオニクス国際会議	700人
6月12日～14日	日本がん分子標的治療学会学術集会	1,000人
6月15日	第115回日本循環器学会近畿地方会	800人
6月23日～27日	第11回世界生物学的精神医学会国際会議	3,000人
6月30日～7月4日	CLEO-PR & OECC/PS 2013	800人

※参加者100名以上の会議（参加者数は概数）

編集後記

自主企画シンポジウム第三弾「若者よ、世界へ飛び出そう！」は、元環境庁長官の広中和歌子氏を迎え、訳書「四十歳の出発」を踏まえつつ、創造性のある成熟への道程を披露していただきました。氷が解けたら何になるかと聞かれたときに、「春」と答える人間にならないといけなと熱く語る学校法人立命館副総長モンテ・カセム氏との対談もお楽しみ下さい。冬号が出来上がりました。ご一読下さい。本年もよろしくお願い申し上げます。

(企画・広報課)

編集発行 公益財団法人 国立京都国際会館
〒606-0001 京都市左京区宝ヶ池
TEL 075-705-1234
FAX 075-705-1223
E-mail com@icckyo.or.jp
URL http://www.icckyo.or.jp/
発行日 2013年1月7日